巡礼のハイライト

前々回、天正少年使節団の教皇謁見について触れた。

「教皇謁見」…世界に何億人もいるカトリック信者にとって、ローマ巡礼、とりわけ教皇謁見は、そのハイライトである。

「ローマ法王」とも呼ばれたが、一九八一年のヨハネ・パウロ二世の来日の際「ローマ教皇」に統一された。

教皇はイエス・キリストの代理者、バチカン市国の元首である。

十二使徒の一人、聖ペトロが初代の教皇で、現在の教皇ベネディクト十六世は二百六十五代目である。

世界中からバチカンに巡礼団が訪れるので、毎週日曜日の午後、聖ペトロ大聖堂前の大広場に集まった人に対して三階の教皇の部屋の窓から祝福が与えられる。これにはだれでも参加できる。

しかし、バチカンの大ホールで行われる毎週水曜日の謁見は、事前に自分の国の大使館を通して謁見申請をしなければならない。

私は今から三十三年前の昭和四十九年（一九七四）、当時の教皇パウロ六世に謁見した。その時の巡礼は広島教区（中国五県）創立五十周年記念として行ったもので、バチカンでの教皇謁見、聖地エルサレム訪問、ルルド、アシジ巡礼など六カ国、十六日間の旅であった。

今考えると会社を長期間休み、幼い二人の娘を親に頼み、費用はローンで支払うなど随分思い切ったことをしたものである。

謁見の際は各国の巡礼団が一時間ぐらい前から歌を歌いながら待つ。民族衣装をつけたグループもいる。いやが上にも盛り上がる。

時間になると、中央通路の後ろから教皇がいすに座った御輿で入場。割れんばかりの拍手。そして、各国巡礼団が紹介される。

「ジャパン・フロム・ヒロシマ」広島はだれにも知られており、拍手が一段と大きく、感激したものである。

謁見の儀式が終わると教皇は祭壇を降り、巡礼団の代表が並ぶ最前列の所に来られ、握手。私も右端の方にいて、教皇はその手前で引き返そうとされたが、私が差し出した右手のマイクロホンに気がつかれ、わざわざ私の所に来られて握手していただいた。

右のマイクを突き出した手が筆者

幸運であった。これを後ろの方で見ていた教区巡礼団の婦人方は、出口のところに来ると「握手した手をさわらせて!!」と大変であった。

びっくりしたのは夜、ホテルに教皇と私が写った写真が届けられたことである。もちろん有料。商魂たくましいとも言えるが。

またヨハネ・パウロ二世が歴代教皇として初めて来日された時、たまたま地区の役員をしていたので、東京で謁見できたが、一人々々握手をされ、ロザリオを直接いただいた。

この時は幼稚園児だった長男の同伴も許され、謁見会場で唯一の幼児だった長男は教皇に高く抱き上げられた。

こうして振り返ってみると、本当に幸運続きである。

にもかかわらず、極めていい加減な信仰。どんな恵みもどう生かすかは本人次第であると改めて思ったのである。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

パウロ六世との謁見